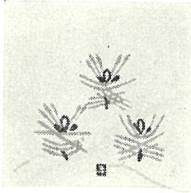


# カウンセラーの目

—現代学生の悩み—



野 辺 地 正 之

重い足音が部屋の前で止り、コツコツとドアをノックしている。「どうぞ」という私の声に応じて入ってくるK君の顔は今日も沈んで暗い。今日で二回目の面接に来たK君は、「青春」などという言葉は一切誰のためにあるのか、といたげな重苦しい表情で、初めて来た日は口数も少なく自嘲的だった。いつものことだがこの時も「ではまた来週の火曜日の二時半にいらっしやい」といって面接を打ち切ったあと、私は若い魂に忍び寄る暗い青春の翳の余りにも多いのに溜息をついてしまった。

「実際、この頃は何も手につかないのです。勉強をする気にもなれず、そうかといって小説を読んだり、映画を観たりする気にもなれません。こんなことではいけない、と思うのですが気ばかりあせて結局何もできないのです。自分がなにもしていないと分るとよけいに不安になります。そしてしまいにはこんな自分になさげなくなるのです。そして、いっそ死んでしまおうか、なども考えたりします。」こんなK君の言葉だったが、問題をもった学生の多くに接している私には、よくあるケースなので格別驚きはしなかったが、本

人にしてみればこれ程の不安定感はないであろう。また親からみれば愛するわが子が勉強のため大学に入りしかも勉強も手につかず、生か死かという悩みにさいなまれているのを知ったらどれだけ心配だろうか。

## 孤独感を味わう頃

大学へ入学して半年ないし一年は新しい生活に順応することで無我夢中であるが、やがて大学生生活に慣れ、勝手が分つてくるとこうした問題をもった学生が、にわかには増えてくる。その原因はいろいろある。大学という社会のもつそれまでの生活と違った雰囲気、巨大なマスの中に一人放り出されたといった感じが大きな不安や緊張感や孤独感を生み出す場合もある。特に一・二年生は一般教育科目が大部分で、大教室から大教室への移動の生活がその毎日であるためこうした傾向は、そう多い。

「大学へ入って生まれて始めての孤独感を味わいました」と女子学生のNさんはいった。「始めて親許を離れて下宿をして友だちもなく、夜になると淋しくて涙が知らず知らず流れます」とはFさんの言葉だった。しかし、

「私は、休憩時間に男や女の友達と楽しそうに笑ったり話しあっている人たちを見ると、自分だけ変っているのかと考えるのです」という彼女の言葉にも注意を向けねばならない。大学にも親友も生まれれば友情もあるのだ。ただ、彼女にはそれが出来にくいのである。

「やりきれない孤独感——これが大学へ入って一ヵ月たつての感想です。ひしひしと迫ってくる孤独。大教室で私は大勢の中にいて感じるこの孤独感をどうすることも出来ませんでした」O君はこう私に訴えた。もちろん、こういった体験は性格により、出身校の雰囲気との差違により、また同じ高校出身の友人の有無により個人的にはかなり差があるであろう。しかし心理学的にいつて、ある領域から他の領域へ、ある身分から他の身分への移行は心理的な不安定感を与えるものであるから、高校から大学へ、地方から都会へ、自宅通学から寮・下宿生活へといった変化は、いちじるしい行動上の安定性の喪失を生む契機となるものと考えられよう。この意味で大学の最初の数ヵ月間は新しい領域、新しい身分への再適応の期間であり、一つの危機である

ともいえるのである。

### 現実からの逃避を試みる

現代の学生生活にとって現実はいはば余りにも苛酷である。この圧倒的な環境から自分を守り、心理的な安定感を確保するために、他の、より重圧の少ない世界へ逃れようとする試みが生まれるのは不思議ではない。

困難な現実との接触を避け、非現実の世界へ逃れ、「空想」という世界の中で安定感を見出そうとする試みは、一般に女子に目立つ傾向である。授業の最中にも、自宅や下宿の自分の部屋でも、乗物の中でも白昼夢は際限なく展開し、そこでは現実の世界で求められない満足感を味わうことも可能である。この昼間の「夢」の世界での主人公はいうまでもなく彼女自身なのだ。

しかしこの「非現実への逃避」も度が過ぎれば、現実と接触する恐怖を招き、まわりの世界への関心や、行動する情熱を喪失させ、あるいは現実と非現実との混同を生じ、周囲の人々に奇妙な感じを与える言動をとることもなかりかねない。

また、現実からの逃避は必ずしも非現実へ

の世界への没入に限られない。酒を飲むこと、激しいスポーツに耽ること、ダンス、読書、旅行、登山、音楽、賭け事などはしばしば現実逃避の目的で、行なわれることもあるのである。試験の失敗と失恋とで半ば自暴自棄になつたD君が私のところに来た時は、学校よりも飲み屋とデヤン屋への出席率の方がはるかに良かったのである。

### 劣等感に悩む人々

「私はどうも容貌に自信がない」「まわりの連中はみんなおれより頭がよさそうだ」こんな気持ちから若い人たちはやがて劣等感に陥ってゆく。自分に自信がもてなかつたり、周囲の人たちと較べて能力が低いと感じたりする傾向は多少とも誰にもあるものなのであるが、青年期のように自分に注意の集中する時期、他人との比較に熱心な時期には、それは見過すことの出来ない問題としてクローズアップされてくるのだ。

元来、青年期は他人を意識しすぎることに問題がある。自分が他人にどうみられるか、仲間が自分をどのように評価しているか、そんな気持が、ほんのちよつとした自分の欠点

や気がかりを自分で過大に評価することにな  
る。

「鏡をのぞくたびに憂うつになる。なんだっ  
て自分はこんな顔に生まれついたのだろう。

大きな口、厚ぼったい唇、細い眼。他の人の  
顔が羨しいと思う。みんな、自分なんか駄目  
なんているに、それぞれ美しいところ  
ろがあるけれど、私といったら美しいところ  
なんか一つだってないんですから」Rさんの  
悩みは深刻だった。こうして彼女は、人前へ  
出ることを避け、休憩時間には一人で御所の  
芝生で時を過した。「対人恐怖」と「厭世」  
が私のところに来た時、彼女の申込みカード  
に記入されていた文字であった。

容貌への劣等感は重く苦しい。それは若い  
人のすべての生活を暗く彩るからである。容  
貌だけではない。背の低いこと、体の釣りあ  
いのよくないこと、脚が太いこと、ニキビが  
多いこと、肥りすぎていること、顔色が悪い  
こと、毛深いこと——種々の身体的条件が劣  
等感をつくり出す。「お前は眼つきがよくない  
い」中学生の頃父親にこういわれた彼は、人  
前へ出るといつも自分の眼つきがよくないこ  
とを相手に悟られていることを怖れた。「あ

れ以来目上の人の前に出るとどうしてもま  
もに相手の顔を見ることができないのです」

S君は眼を伏せたまま訴えていた。「無理に  
顔をあげて相手の顔をみようとすると涙が出  
そうになつて、頬の筋肉がピリピリひきつる  
のです」就職の面接試験を前にしてS君は必  
死だった。「僕の眼つきは本当によくはないの  
でしようか」若人らしい輝いた瞳だった。観  
念的・主観的な劣等感は青年期に特に多い。  
実際に具合の悪い点、劣った点がないにも  
かかわらず、自分で思いこんでいる場合であ  
る。

異性への適応に失敗する人たち

「共学」の生活はまた別の問題をも生む。異  
性への適応の問題である。ある女子高校出身  
のAさんは、大学へ来て男子の学生と一緒に  
生活する毎日に緊張感をもち、やがて強い不  
安に悩まされた。教室で男子の学生と机を並  
べて講義を聞くことは彼女を落ちつかせず、  
男子の学生と口をきくことにも、大きな抵抗  
を感じた。男性は彼女にとって余りにも未知  
なものであり、全く異質的な対象でありすぎ  
たのである。男の学生と議論したり、休日

問題別・学部別カウンセリング状況

(大学生部課・1966年度)

領域	学部別										計										
	修学		相談		心理		健康		職業		経済		計		計		計				
	学業	学業	留外	課活	人	対人	異性	家庭	自信	心理	身	呼吸	大学	就職	ア	奨学	修学	健康	職業	経済	
神	3	3			21	2	4	4		13	10						3	3	10	3	3
文	87	5	3		2	2	4	4	4	13	10	2		3	1	2	119	29	11	10	182
	(30)	(2)	(2)		(9)	(4)	(4)	(4)		(7)	(4)	(1)		(5)	(1)	(6)	(43)	(26)	(5)	(7)	(76)
法	10	6	2	2	8	1	1			14	4						88	22	2	15	132
	(1)	(2)			(1)					(1)							(4)	(1)	(1)	(1)	(7)
経	12	11	1	7	17	1		2		13	1		2	4			90	17	2	11	126
	(2)	(2)			(2)					(1)							(2)	(1)	(1)	(3)	(3)
商	6	9	2	2	12	1	1	1		6	4	2			10		59	15	1	10	7
	(2)	(2)			(2)					(2)	(2)						(2)	(2)	(2)	(2)	(3)
工	9	28	2	4	7	1	2			6	1		1		2		36	10	1	2	51
	(2)	(2)			(2)					(1)							(2)	(10)	(1)	(2)	(3)
計	31	139	135	10	15	65	6	6	9	52	20	4	1	8	5	44	395	103	49	30	586
	(3)	(4)	(4)	(2)	(2)	(12)	(2)	(4)	(4)	(8)	(5)	(1)		(1)		(6)	(52)	(28)	(1)	(2)	(89)



グループでハイキングに行ったり、コンパに参加することは彼女にとって命がけの芸当にも近いことであった。Aさんだけではない。特に女子だけの高校からの出身者の場合、男性に対して過度の緊張感を抱きやすい。講義がおわってドッと流れ出る男子学生の群れに逆行する時の彼女たち、講義の合間にキャンパスに溢れる男子学生の間を縫って次の教室に急ぐ時の彼女たちの心理的緊張を知る人たちは恐らく少ないであろう。出来得るだけ彼らの視線を避けて「裏街道」や「間道」を急ぎ足で教室へ向うMさんや、一人では校門から入れないために友だちを待って門衛所脇に付むGさんもいた。異性に正しい適応をするということとは人間にとって必要な問題であってそれが損われている場合、その人は健全な家庭生活も幸福な社会生活も期待することはできない。この意味からも大学で異性と机をならべて勉強し、グループやサークルで互いに意見を交換し、行動を共にすることは好ましいパーソナリティを発展させる上には是非必要なことであろう。

### 自分の殻に閉じこもる

適応の困難な状況に直面した場合に、その環境との接触を避け、あるいは周囲の人々から孤立しようという傾向が見られる。環境の圧迫や他人の干渉を避けて、自分の周囲に壁を築いてその中に閉じこもることによって自己を守ろうとするのである。

キャンパスに繰り広げられる若い人々の群れ、友人との語らい。その中であつて群れから離れて一人自分の世界の中に閉じこもつている青年がある。彼にとって一人であることが安心なのだ。「孤独ノ 何という好い響きか。一人の世界にこそ、慰めがあり喜びがある」Y君は手記にこう書いている。自分の殻に閉じこもる傾向は友人からの孤立ということだけでなく、読書や白昼夢への耽溺、秘密をつくること、緘黙、人中へ出ることの嫌悪他人の干渉に対する不快感、自分の部屋へ閉じこもること、自然への接近、日記や手紙を書く楽しみなども現われ、さらに進むと、人間嫌悪、厭世、自己嫌悪、自嘲的態度などになって現われる。

また自己への逃避が極端になれば、いわゆ

る自閉的傾向が発展して、現実の環境への関心が薄れ、周囲の人々との感情的な共感性も失われ、自分だけの主観的な世界の住人になり、健康な社会生活への参加も困難になる。

### 暗い谷間からの脱出

大学の四年間の生活を終えて青年期は完了する。青年期は人生に対する基本的な態度を組み立てる時期である。したがって大学の四年間は貴重なものといわなくてはならない。明るく美しい青春の日々を積み重ね、人生に対する健やかな態度を築いてゆくことが、大学生活をして成人してから豊かな泉として回想させてくれるであろう。

若い魂に忍び寄る暗い翳を打ちほらして、明るい光の中を歩かせたい。大学生活が人生の暗い谷間であつてはならない。

モーリス・ドベスがその著「青年期」を結んでいっている——遊びたわむれる小猫が、やがてそれが生んだ仔猫をじゃらすように、豊かで元気のない青年期は、成人期の征服の準備をし、大人になつても活動をつづける、と。

(文学部教授・青年心理学)